

一番大事なことは

絵を描くとか

描かないとか

じやなくて

心つてものが

一番必要だと

思うんです

石



アフロディア

◆ 石本正記念展示室 ◆ 「石本正作品選Ⅳ」より

「私の舞妓」

今回の作品選Ⅳでは、石本芸術を代表する舞妓の作品に加え、石本正が実際に舞妓を目の前にしながら描いたデッサンやスケッチブックなども併せて展示するコーナーを設けています。

一九五七（昭和三十二）年頃、石本は舞妓や芸妓を絵に描くため、祇園に通い始めました。彼女たちは、絵書きのモデルなどしたことだけでなく、いざデッサンを始めてもすぐに体を動かしてしまいます。あんまり動くので、どうとう描かずじまいで終わつた事もあつたようです。

「さて僕の目にかなう舞妓があらわれた。歌も踊りもとび出さない写生の三時間こそ彼女にとつてもつとも『長い長い時間』にちがいない。遊びたいざかりの年ごろだけに、つい話はボウリングや映

画のことになる。ぼくにはとんと興味のないことばかり。おたがいに忍耐の三時間である。写生をしていなければ、きっと白いえりあし、あゆのような指先、花のようなかんざしがにおう愉しみを感じさすにちがいない。

「舞妓」1969（昭和44）年

ぼくの描こうとしている舞妓は、いま目の前にいる彼女ではない。実在している彼女を通して、ぼくは自分のイメージの中でのみ生きている舞妓を描く。描くというよりも必死でその姿なき像を追求する。それは何百年もの間たくさんのかきたちによって描かれてきた人形のように美しい舞妓ではない。美しくはなや



展示中のスケッチブック

かな外相の奥にある舞妓のいのちといつたものを、ぼくは描き出そうとする。おるけやたのしみなど、とんでもない。〔毎日新聞〕

（一九六八（昭和四十三）年一月五日／毎日新聞）

このようなエピソードとともにデッサンを見ていると、アトリエの中での画家と舞妓の姿が心に浮かび、会話まで聞こえてきそうです。

神秘的で哀愁漂う舞妓作品が生まれるまで、画家の眼にはどのよう目の前の舞妓の姿が映っているのかをうかがい知ることができます。

感情の赴くままに

一一〇〇三年三月に勃発したイラク戦争。三月二十日に行われた攻撃の様子をニュースで見た石本が、怒りや悲しみの感情のままに一晩で描き上げた「三月二十日暗黒の眠り」という作品があります。この作品についての石本の言葉をご紹介します。

「三月二十日、バグダッドはアメリカ

のブッシュの悪魔によつて爆撃される。チグリス・ユーフラテスの世界文化発祥の地でもあるイラクを平氣で爆撃するアメリカの高慢さと文化平和に対し微塵の理解もなくまたそれに追従する日本政府に対し怒り以外どうすることもできない私自身の無力に、その夜は徹夜でイラクの絨緞の上で休む美女を描きながら、ど

「石本正作品選」では、青年時代から晩年に至るまでの画業の全貌を、展示作品を年四回に分けて入れ替わながら紹介します。収蔵作品の中から選び抜かれた名作の数々を、ぜひ会場でご覧下さい。



「三月二十日暗黒の眠り」2003（平成15）年

うにもできなかつた私自身の気持ちの捌け口を求めたことであつた。」（後略）

〔イタリアへの想い〕石本正／「トスカーナの空 青春頌歌 岡崎忠雄作品集」（二〇〇三年発行）より

怒りと悲しみの感情の赴くままに描かれた作品でありながら、眠る女性の表情がとても穏やかにも見えることが印象的です。

「絵は心だ」という画家の言葉をそのまま表したような、晩年の代表作の一つです。

◆企画展示室◆「石本正、心の眼1～私を感動させた日本画～」

石本が素晴らしい絵だと心から感動して選び、石正美術館に収蔵された約百五十点の現代日本画家の作品の中から、厳選した十七点を紹介しています。

二〇〇一年に、自らの作品を収蔵・展

示する石正美術館ができたことをきっかけに、石本正は『文化』は流行ではなく心や気持ちが一番大事だということを、

ふるさとである島根県浜田市から発信して欲しいと願い続けていました。そして、百五十点余りの他作家の作品を自らの心の眼で選び、それらを浜田市が購入して二〇一〇年に増設された新館に収蔵されました。以降当館は、石本の作品だけで

はなく、彼にゆかりの深い現代日本画家

の作品も併せて鑑賞する事ができるようになりました。石本は、このことについて次のような言葉を残しています。

「絵を見るときは、名前や肩書きで見ないで欲しい。先入観を持たず、作品に素直な心で向き合ってほしい」石本正

どの作品も、感動にあふれた素晴らしい絵画を多くの人に見てもらい

たいと、石本が心から願つていてるものばかりです。ぜひ会場で、それぞれの作品をゆっくりとご覧頂きたいと願っています。



川端健生「昔日」1993（平成5）年

哀愁やせつなさ…

文学性と絵画性の融合

川端健生（一九四四～一九九五）は石

本の教え子でもあり、その詩情あふれる

世界観を、石本が高く評価していた画家の一人でした。石本と同じく創画会を中心とした作品発表を続けていましたが、一九九五年に五十一歳という若さで亡くなりました。

彼が残した作品の藝術性について、石

本は次のように語っています。

「彼ほど文学と絵画を画面に定着させ

た作家は現在見当たらな

い。（中略）身近にある色々

な家具、野菜、又一貫して

描き続けた最愛の二人の子

供達。それは愛に貫かれた

素朴な川端君の精神そのも

のであり、我々に語りかけ

る言葉でもあった。彼は非

常に地味であり、一般受け

しない処が彼の本領でもあ

る」〔石本正「川端健生君の藝術」

〔川端健生作品集 黄昏変相〕一

九七七年／芸艸堂より〕

今回展示中の「昔日」は、とても丁寧な筆使いで少年と狛犬が味わい深く描かれ、なにか懐かしさのよう

こか遠くを見ているような少年の眼。目の前の我が子を描きながら、画家自身の郷愁を重ねていたのかもしれません。

生と死を凝視

「穢土・源生」。「穢土」とは人間が生きるこの世―「現世」の事です。小嶋悠司（一九四四～二〇一六）は生涯「人間」を描く事をテーマとし、その姿を見つめ続けました。人間の傲慢と愚行が引き起こす、現世における様々な事象や苦しみ。それらから目をそらす事なく対峙してきました。画面からは、暗さや重さだけではない、尊い生命に対する祈りにも似た強い思いが伝わってきます。

彼は石本正の教え子の一人で、京都市立美術大学在学中には「人物をやるなら血の通った人間を描け」と石本から教え込まれたそうです。また、石本が最も信頼を寄せた同志の一人でもありました。彼は、二〇一五年に石

本正が亡くなつた翌年、まるでその後を追うように七十二歳で亡くなりました。石本と

いた画家としての生き方は、今も多くの画家からの尊敬を集めています。

また本展では、「祈りの部屋」でいつでも観ることができます。

岡崎忠雄（一九四三～二〇〇二）の模写「キリストの復活」も、石本の心を感動させた作品を象徴するものとして、岡崎の日本画の代表作「径・トスカーナ」と並べて展示するという新たな試みもしています。ルネサンス期の画家ピエロ・デッラ・

フランチエスカの「キリストの復活」を模写をしながら、彼がイタリア現地で見ていたであろう風景。喜びにあふれた画家の姿を心に浮かべながら、ぜひ模写と合わせてご覧ください。



現在の「祈りの部屋」の様子▶

◆「石本正作品選Ⅳ」（石本正記念展示室）

◆「石本正心の眼1～私を感動させた日本画」

（企画展示室）【出品作家】池田知嘉子・岩本和夫・岡崎國夫・岡崎忠雄・奥村美佳・梶岡百江・

川端健生・小嶋悠司・近藤弘明・今美礼・中原麻貴・中村文子・西久松吉雄・藤本直司・吉川弘・吉村和起（五十音順）

【会期】三月十八日（日）まで

この度、年末年始のお休みを利用して、初めてイタリアへ行つてきました。石本正先生が憧れいつも夢見ていたイタリア。晩年に「イタリアへもう一回行きたいけど、もう行けないからな」と少しさみしそうにおっしゃっていたことを今も思い出します。

これまで先生の絵や文章で勉強しながら、展覧会の企画をしたり文章を書いたりしてきましたが、先生の思想のうちで最も重要なロマネスクをはじめとする『中世ヨーロッパ美術』について触れるとき、本物の作品を見たことがないままでは何も実感を持つことができず、やはりいつかは行かないといけないなあ」とずつと考えていました。今回旅慣れた友人がイタリアへ行くというので、これも何かのチャンスだと思い私も一念発起して一緒に行くことに決めたのでした。

イタリアでの滞在はたつたの五日間でしたが、五日間だったとは思えないくらい充実していたと思います。目にしたるものここまで全て書いてみたいところですが、今回は特に石本先生が憧れ、自らの絵にもイメージを重ねた二つの作品について触れたいと思います。



イタリアの旅 ①

【夫婦の陶棺】

ヴィラ・ジュリア国立博物館／ローマ

「以前から何度も通つてはいたのだが、今回は丸一日、この寝棺の前から動かなかった。見てるだけでも感動するのに、描いていると更にその度合いが増して、どうにもそこから動けなくなってしまうのである。結局、すぐ隣のボルゲーゼ美術館にすら足を延ばさなかつた。私の好きなクラナッハがあるというのに。」

「(前略)特に彼ら夫婦の表情の人々の生活をうかがい知ることができる出土品を観ることができます。この博物館の象徴的存在ともなつてゐる「夫婦の陶棺」は一階と二階が吹き抜けになつてゐる丸い小さな部屋になりました。そこは、それだけを展示する特別な空間になつていて、三六〇度どの方向からでもじっくりと鑑賞できるようになつていました。

「(前略)特に彼ら夫婦の表情の人々の生活をうかがい知ることができる出土品を観ることができます。この博物館の象徴的存在ともなつてゐる「夫婦の陶棺」は一階と二階が吹き抜けになつてゐる丸い小さな部屋になりました。そこは、それだけを展示する特別な空間になつていて、三六〇度どの方向からでもじっくりと鑑賞できるようになつっていました。

黄泉の世界でもこんな世界ならば行つてみたいという気持ちにさせられる。」

たしかに夫婦の優しく微笑んだ表情を観ていると、こちらまで口元がほころんでくるようでした。当時の権力者の夫婦の姿をかたどつたものなのでしょうか。遺体をおさめる棺であります。この像について「リアリズムを越え、東洋も西洋も越えた何か『異質』の美がこの寝棺にはある。」と語った石本先生の言葉の意味が、ほんの少しだけ分かつたような気がしました。

私の眼に特に印象的に映つたのは二

人の手の表現でした。特に女性がスッと前に差し出した両手は、それだけを見ると仏像の手のようにも見えるしなやかで美しい形をしていて、神秘的にさえ見えました。この像について「リアリズムを越え、東洋も西洋も越えた何か『異質』の美がこの寝棺にはある。」と語った石本先生の言葉の意味が、ほんの少しだけ分かつたような気がしました。



「春」サンドロ・ボッティチエリ (1431-1506)／ウフィツィ美術館蔵

【春（プリマヴェーラ）】
ウフィツィ美術館／フィレンツエ
先生が生涯憧れつづけたボッティチエリの「春」。本物はどれほどに美しいのだろうかと、心おどらせながらウフィツィ美術館を訪れました。ここには他にも、先生が言葉を残しておられる作品が数多くあるのですが、今回は「春」のことだけ触れておきたいと思います。

「春」はボッティチエリの作品だけを集めた大きな部屋の中につけて、身長一五四センチの私の目線が、人物たちの足元をようやくじっくりと観るこ

とができるくらいの高さで展示していました。そのため、残念ながら女神達の表情や肌の表現を間近で見ることはできませんでしたが、遠くから離れ全體を観るだけでも、肌の質感や微妙な陰影を画家がいかに纖細に気を遣つて丁寧に描いているのかが伝わってきました。また驚いたのは、顔を近づけて観ることの出来た足元の草むらです。そこにはシオンやスミレなどの小さな野の花が一面に咲いているのです。女神達だけでなく、こうした足元の表現さえも手を抜かずに描かれているのを見て、まるで画面全体で春のよろこびを謳いあげているようだと感じました。

ただこの作品は、一九八一年に表面のくすみを取り除く修復が行われたため、先生が最初に見た時とは様子が少し違っているようで、次のような言葉を残しています。

「あの頃の『春』は春の女神を中心とした群衆の周囲に描かれた花や木の葉は非常に暗くてじつと目をこらすとやや見える程度で、そのような背景の中に三美神やヴィーナスが軽やかにくつきりと浮き出していた。(中略) 女神達の足もとの花々も森の葉も、なにもかもがはつきりと見えるように、きれいに掃除されてしまった『春』を見ていると、果たしてボッティチエリは、全てのものをここまではつきりと見せたかったのだろうかといぶかつてしまう。画面は同じ年代を経ていてながら、三

とができるくらいの高さで展示していました。そのため、残念ながら女神達の表情や肌の表現を間近で見ることはできませんでしたが、遠くから離れ全體を観るだけでも、肌の質感や微妙な陰影を画家がいかに纖細に気を遣つて丁寧に描いているのかが伝わってきました。また驚いたのは、顔を近づけて観ることの出来た足元の草むらです。そこにはシオンやスミレなどの小さな野の花が一面に咲いているのです。女神達だけでなく、こうした足元の表現さえも手を抜かずに描かれているのを見て、まるで画面全体で春のよろこびを謳いあげているようだと感じました。

ただこの作品は、一九八一年に表面のくすみを取り除く修復が行われたため、先生が最初に見た時とは様子が少し違っているようで、次のような言葉を残しています。

「あの頃の『春』は春の女神を中心とした群衆の周囲に描かれた花や木の葉は非常に暗くてじつと目をこらすとやや見える程度で、そのような背景の中に三美神やヴィーナスが軽やかにくつきりと浮き出していた。(中略) 女神達の足もとの花々も森の葉も、なにもかもがはつきりと見えるように、きれいに掃除されてしまった『春』を見ていると、

女神やヴィーナスだけがくつきりと浮かび上がり、背景との対比を成しています。

一九六八(昭和四十三)年に、石本先生は舟屋や雪山など日本の風景を描いた作品だけを発表する個展を開催しています。この時に発表した風景を通して、「ボッティチエリの様な人物と風景の統合された構成が今の自分の一つの目標である」と、当時の先生は語っていました。そうして生まれたのが、

同年に発表された「舞妓」でした。かつての「春」のイメージに重ねられていました。木立ちの前に静かに立つ三人の舞妓。それを思い浮かべながら「春」を見ていると、目を輝かせながらこの絵の前に立つ、昔の先生の姿が心に浮かんでくるようでした。



「春」部分／女神達の足元に描かれた花々

今回の五日間のイタリア訪問で出会った事柄について、書きたいことはもつともつとたくさんあるのですが、とてもこのページ数だけでは足りません。今後このコーナーを使って、少しずつ文章にしていけたらと思っています。

先生がかつて得た感動とはすこし違うのだな、と思うと多少残念な気持ちもありましたが、今の修復後の「春」は初めて本物を見る私にとっては例えようもなく美しく感動的なものであつたことは間違ありません。次に本物の前に立つのはいつになるか分かりませんが、それまできつとこの感動を忘れることはないでしょう。



石本正「舞妓」1968(昭和43)年

(学芸員 横山由美子)

ギャラリー展示

「光の回廊」写真展

2.10 土
→ 3.11 日

9時～17時
月曜休館

入場
無料



鎌田由美

昨年12月に開催した「光の回廊 2017」の写真展。

会期中に行われた「ナイトミュージアム写真教室」受講生と講師の安立誠先生の作品のほか、地元写真愛好家の皆様からお寄せいただいた作品を展示します。照明作品をそれぞれの視点で切り取った、魅力あふれる写真の数々をぜひ会場でご覧ください。

コンサート

サックスコンサート それぞれの旅立ち vol.4

3.24 土

入場
無料

【時間】
14時～16時
(開場13時30分)



サックス講師・杉本孝一さん(浜田市)の指導を受ける生徒が、高校や中学を卒業することを記念し、ソロやアンサンブルで曲を披露します。進学しさらに楽器演奏の高みを目指し、巣立っていく子供たちの演奏をお楽しみください。

コンサート

コトノブラザーズコンサート

3.31 土

入場
無料

【時間】
14時～15時30分
(開場13時30分)

【出演】
琴野一心(大学3年)
琴野海流(大学1年)
琴野研志郎(中学3年)



創作教室

古布で「童子と鯉のぼり」作り

講師：木村 喜代子さん



【全4回】時間：13時30分～16時(各回共通)

①2.21水 ②2.28水
③3.7水 ④3.14水

材料費 3,800円(全4回) ※要申込み(定員10名)
持ち物：針、絹糸(白・黒)、はさみ、まち針

古布人形作家の木村喜代子さんを講師にお迎えし、4回の講座を通して「童子」と「鯉のぼり」の2つの作品を作ります。春先に完成させて玄関やお部屋に飾れば、一足早く「端午の節句」を感じるインテリア小物として楽しめます。日頃からお裁縫されるのがお好きな方にオススメの教室です。

ギャラリー展示

心彩る 古布の四季 山本楷子作品展

3.24 土
→ 4.1日

9時～17時

(最終日15時まで)

入場
無料

のりこ
山本楷子作品展

浜田市在住の古布作家・山本楷子さんの作品展。「落ち着いた中にも華やぎのある品々を」とのコンセプトで制作された、四季折々のタペストリーやお細工物が展示されます。

物作りを始めて15年余り、独学で試行錯誤の作品ですので稚拙な所も多々あると思いますが、一つ一つ私の想いを込めた作品ばかりです。

今回、石正美術館様のご厚情を賜り、このような作品展を開かせて頂く事となり、嬉しいかぎりです。

皆様一人でも多くの方に見て頂きたいと願っております。

山本 楷子

浜田市出身の琴野家3兄弟によるコンサートです。学業のかたわら、幼い頃からピアノを習い続けてきた3人。同時に管弦楽団や吹奏楽部に所属し、それぞれ管楽器に取り組みながら、演奏の幅を広げてきました。そんな「コトノブラザーズ」がこのたび兄弟そろっては初となるコンサートに挑戦します！

3人でのピアノ6手連弾をはじめ、ピアノと管楽器を織り交ぜながら、クラシックやジャズ、ポピュラーなど多彩な楽曲を披露します。ぜひ会場であたたかな拍手をお送りいただけますと幸いです。

SCHEDULE 石正美術館スケジュール

石本正記念展示室	企画展示室	ギャラリー 【入場無料】	ミュージアムパフォーマンス・創作教室
1 石本正作品選Ⅳ	石本正心の眼1 「私を感じさせた日本画」	2.10 土 ↓ 3.11 日 「光の回廊」写真展	1.27 土 13時～16時 古布で布ぞうりをつくろう 材料費：500円 定員：10名 参加費 要申込み
2 1.2火 ↓ 3.18日	1.2火 ↓ 3.18日	ギャラリー利用について 石正美術館では作品展示の会場としてギャラリーの貸出をしています。グループや個人の作品発表の場として多くの方に利用をいただいています。 絵画・写真・書道・立体作品・着物など、様々な作品の展示が可能です。(生花や生物などの展示は出来ません。) 詳しくは石正美術館までお問い合わせください。 利用料：1日 2,160円（税込み） ※利用料金は電気代・什器利用代など含む ※当館の展示スケジュールにより日数などの変更をお願いする場合があります	2.4日 13時～15時 古布でまめびなをつくろう 材料費：1,000円 定員：15名 講師：吉岡昌子さん・岩本直子さん 参加費 要申込み
3 3.19月 → 3.23金	展示替休館	CLOSED	2.21水 古布で 2.28水 「童子と鯉のぼり」作り 3.7水 材料費：3,800円 定員：10名 講師：木村喜代子さん 13時30分～16時（各回共通） 第54回石本正絵画教室 3.10土 「裸婦デッサン会」 3.11日 特別講師：池田知嘉子先生（日本画家） 参加費：7,500円 参加費 要申込み
4 石本正作品選2018年度 1	石本正素描展 「イタリアの思い出」	3.24土 ↓ 4.1日 心彩る 古布の四季 山本楷子作品展 最終日 4.1は15時まで	3.24土 14時～16時 サックスコンサート それぞれの旅立ち vol.4 入場無料
5 3.24土 ↓ 6.24日	3.24土 ↓ 6.24日	4.3火 ↓ 4.15日 三隅の桜展（仮） 最終日 4.15は15時まで	3.31土 14時～15時30分 コトノブラザーズコンサート 入場無料
		4.28土 ↓ 5.11金 島根デザイン連盟展（仮） 最終日 5.11は15時まで	4.15日 14時～15時 春～かえで✿旅立ちライブ 入場無料

石正アフロディア サポーター通信



報活動

「光の回廊2017」
中庭に輝く「冬の天の川」

12月6日（水）、寒空の下駆けつけてくださいました8名のサポーターの皆さんと一緒に光のモニュメントづくりを行いました。今年は、風雨に強いイルミネーションを多用し、美術館植え込みや中庭に設置。試行錯誤の未完成した中庭のモニュメントを点灯させると、まるで「天の川」のように美しい光輝く姿が！夜間開館時には、来館者の皆様にも大変喜ばれました。ご協力ありがとうございました！



SEKISHO ART MUSEUM

利用料金

開館時間 9:00~17:00

休館日 月曜日

（月曜日が祝日の場合開館・翌日休館）

展示替え期間

（平成30年3月19日（月）～3月23日（金））

観覧料 展覧会によって異なります。

展覧会情報ページにてご確認ください。

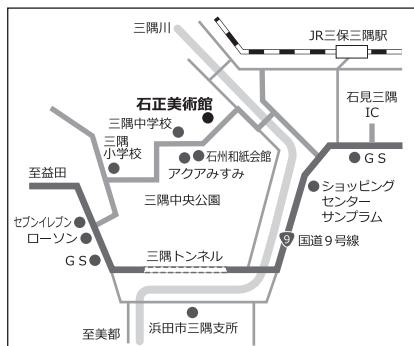
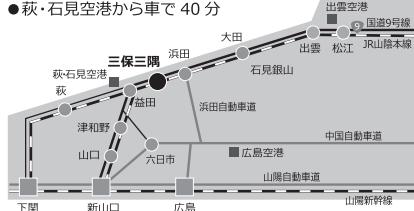
※2名以上は団体料金。

※身体障がい者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方は半額。介助者は無料です。

※「しまね家庭の日」毎月第3日曜日は「しまね家庭の日」（家族連れの高校生・中学生・小学生は無料）。

石正美術館へのアクセス

- 最寄駅 三保三隅駅から車で5分
- JR山陰本線 浜田駅から三保三隅駅まで列車で20分
- 広島駅から浜田駅まで高速バスで2時間
- 浜田自動車道 浜田ICから車で20分
- 山陰道 石見三隅ICから車で3分
- 秋・石見空港から車で40分



石正美術館 ミュージアムニュース

アフロディア

No.135

Winter 2018

平成30（2018）年1月23日発行

編集・発行 浜田市立石正美術館

〒699-3225 島根県浜田市三隅町古市場 589

TEL 0855-32-4388 FAX 0855-32-4389

Eメール sekisho@mx.miracle.ne.jp

<http://www.sekisho-art-museum.jp/>

石正美術館 検索

f 「浜田市立石正美術館」で検索



洋画教室

～ドローイング・デッサン・油絵・アクリル画～

講師：野村 泰二（日本美術家連盟 会員）

指定受講日 9:30~16:00

油絵・アクリル絵具をそれぞれの画材の中心にして、それらの特質である画材としての多様性を活用し、自らの表現を大切に、描く楽しさを味わう教室です。ドローイング・デッサンからエスキース、支持体の作成からマチユエル研究、本制作へ展開します。



定員15名 受講料 15,000円 4月～12月（全9回）

※洋画教室のみ9カ月（4月～12月）の講座期間になります。

島根学

講師：神 英雄（歴史地理研究者・安来市加納美術館館長）

第4土曜日 10:00~11:30



古代から現代までの島根の様々な事象を探りあげて、歴史・芸術から食の話まで、楽しのみながら学べます。

定員30名 受講料 6,000円

前期 4月～9月（全6回）

春から、
新しく。

石正美術館の

美術講座

募集開始日

3月1日（木）

講座期間

前期（平成30年4月～9月）

洋画教室のみ、平成30年4月～12月

定員になり次第〆ります

日本画教室

講師：平坂常弘（石正美術館館長）

第4日曜日 9:30~16:00

定員20名 受講料 10,000円

前期 4月～9月（全6回）

初めての日本画

講師：横山由美子（石正美術館芸芸員）

第3日曜日 9:30~12:00

定員10名 受講料 5,000円

前期 4月～9月（全6回）

※「日本画教室」「初めての日本画」は継続受講の方多数の場合、受講受付を行いません。
詳しくは石正美術館（0855-32-4388）までお問い合わせください。

申込方法

- 「募集開始日」から当館にて受付を始めます。
- 所定の「受講申込書」とともに受講料を一括前納してください。
- 各講座とも定員になり次第締め切らせていただきます。（定員未満であれば学期の中途受講も可能です）
- 受講者証をお渡しします。